

(別紙)

梅雨期の大雨・長雨に対する農作物の栽培管理について

令和8年(2026年)年6月24日
北信農業農村支援センター

1 共通事項

- (1) 長雨に備えて、早めに施設やほ場周囲に明きよ等の排水対策を講ずる。
- (2) 滞水したほ場は、早急に停滞水の排水を図る。
- (3) 曇天・長雨により病害が発生しやすくなるので、農薬散布と耕種的な防除を徹底する。
農薬散布に際しては適用作物、散布時期・回数・希釈量等、最新の登録内容を遵守するとともに、散布むらや死角となる箇所がないように留意する。
- (4) 露地栽培では、気象情報に留意し防除を行う。また、泥や雨滴の跳ね上がりにより病害の発生を助長するので、ポリマルチ、敷きわら等を敷く。
- (5) 施設栽培では、曇天により軟弱に生育しやすくなるので換気や循環扇等を利用し、温度と湿度をコントロールする。
- (6) 降雨時の収穫及び調製作業は、出荷物の品質が低下しないよう細心の注意を払う。

2 水 稲

- (1) 大雨等で茎葉が長時間にわたって水没することがないように、冠水した場合は、早めに排水を図り、流入した異物などを除去するとともに稲体に付着した泥を洗い流す。
- (2) 除草剤の使用に際しては、雑草の発生状況に留意して農薬登録に記された散布適期の範囲内で遅れずに散布する。また、散布直後の大雨により田の水が溢れ、除草剤の効果が低下することがあるため、散布タイミングに留意する。
- (3) いもち病の感染好適条件が確認されている地域もあるため、ほ場を確認し葉いもちの発生が確認され次第早急に薬剤散布を行う。いもち病対策の苗箱施薬剤未使用田、山間地域の常発地域では特に注意する。

3 麦 類

未収穫ほ場では排水口、暗渠を開け、常時排水を行うとともに、倒伏、穂発芽等が見られるほ場は刈り分けを行う。

4 大豆、そば

- (1) 停滞水をできるだけ早く排除できるよう、排水路を点検、整備しておく。
- (2) 転換畑における播種後の大豆ほ場、収穫前のそばほ場では、排水口、暗渠を開け、速やかに排水を行う。
- (3) 転換畑における播種前の大豆及びそばほ場では、事前にはほ場周囲溝の施工、排水口や明渠を開け、排水を行い、土壌の乾燥を促し播種作業に備える。
- (4) 大豆作において、降雨により準備した除草剤の散布が遅れた場合は、指導機関に相談し、生育ステージにあった有効な除草剤を選択し散布する。

5 野 菜

(1) レタス類

降雨に伴い病害の発生が増えてくる。これからの時期、べと病や細菌性病害(斑点細菌病、

軟腐病、腐敗病)の発生が多くなる。現地で栽培されている品種の特性に留意して防除対策を講じる。

(2) アブラナ科野菜

黒斑細菌病等の発生が増加するので、育苗期から発病状況に留意し、防除対策を講じる。他の細菌性病害(軟腐病、黒腐病など)についても、時期を失しないように防除を行う。

(3) アスパラガス

立茎期がほぼ終了し、今後、夏芽の収穫期に入り茎枯病の二次感染が始まる時期でもあるため、薬剤散布により茎枯病の防除を図る。

(4) セルリー

梅雨の降雨により、斑点病や葉枯病、その後は軟腐病など病害の発生が増加するので、防除を徹底する。また、生育状況に応じて、カルシウム剤などの葉面散布を行う。

(5) きゅうり

曇雨天が続くと、軟弱徒長気味になりやすい。古葉、病葉、日陰を作っている葉を摘除し葉の更新と側枝発生を促す。側枝の発生が弱い場合は、摘心を遅らせる。奇形果や病果は早めに除去し、草勢維持を図る。各種病害が混発することが予想されるので、風通しを良くするとともに予防防除、早期防除に努める。

(6) スイカ

曇雨天が続くと着果不良が懸念される。交配作業は開葯を確認して、ていねいに行うとともに交配後の保温に努める。降雨中の交配作業では、雌花及び花粉が雨でぬれないように注意する。

(7) ズッキーニ

天候不良時の着果安定策として着果ホルモン剤の活用や人工授粉を徹底する。スイカと同様に花粉が降雨等の水滴に濡れないように留意する。

(8) 施設トマト、カラーピーマン

ア トマトは過繁茂になりやすいので、側枝、下葉の摘除は早めに行う。

イ カラーピーマンは主枝の誘引が遅れないように作業を行う。中段付近の着果が不安定となることから、状況に応じて側枝着果を行い、全体の着果量を確保する。

(9) ジュース用トマト

着果ホルモン剤の確実な処理により、着果を促すとともに、立性品種では株分け作業を適宜行う。炭疽病や疫病、オオタバコガ等に注意して下葉等に薬液がかかるよう防除を行う。

6 果 樹

(1) りんご

ア 曇雨天が続くと低日照となるので、徒長枝の間引きや枝吊り、誘引、支柱立てなどの夏季管理を行い、日照の有効利用を図る。併せて、農薬散布時の散布むらを解消する。

イ わい性台木は耐水性が劣るので、わい性台木樹園では、特に排水対策の徹底を図る。

ウ 黒星病、黒点病、斑点落葉病、褐斑病、炭そ病、輪紋病などの病害の発生が懸念されるため、地域の防除暦に従い、適正な間隔での防除を励行する。

(2) ぶどう

ア 副梢の切除や摘心などの新梢管理を徹底し、枝梢の充実を図る。

イ 摘粒を速やかに行い、早めに袋かけを実施して、薬剤散布を実施できるようにする。

ウ 無核品種は、ベレーズン期となる7月中旬以降に雨が長引くと、果実肥大が促進され着色が遅れる傾向となりやすい。新梢管理で受光体制を整え、適正着房量を厳守することで正常な成熟を促す。特に、裂果しやすい品種では徹底する。

エ 多湿多雨が続くことによってべと病、晩腐病の発生が心配される。防除適期を逃さないよう留意し、散布むらのないように十分量を散布する。

(3) もも

ア 支柱立てや枝吊り、徒長枝の間引きを行って受光体制を整える。また、曇天が続くと光合成量が減り、袋かけにより生理落果することがあるため袋かけは適期に行う。

イ 梅雨期が長引いた場合は、灰星病などの腐敗病が問題となるので、定期的な防除を実施する。また、せん孔細菌病の発生にも注意する。

ウ 除袋後であっても、雨が多い場合は追加防除を行う。反射マルチも一時片付けて実施する。

エ 曇天が続くと果肉先行・着色不良となるため、過熟果とならないよう、適期収穫を心がける。

(4) なし

ア 根の活性を下げないため、明きょなど排水対策を徹底する。

イ 新梢管理を行って日照を有効に利用する。

ウ 黒星病、黒斑病の発生が懸念される。適正な間隔での防除を励行し、防除徹底を図る。

(5) その他核果類

すもも及びプルーンは、灰星病、炭疽病などの腐敗果の発生や過熟果に留意する。なお、スモモヒメシクイの多発期にもなるため、防除を徹底する。

7 花 き

(1) 施設栽培

ア 日照量が不足すると着蕾数の減少や軟弱化など品質への影響が大きいため、曇天時は受光を遮る資材等は一か所にまとめて、施設内に十分光が入るように留意する。また、受光状態と風通しの改善のため、間引き、下葉整理等茎葉管理を徹底する。

イ 曇天が数日続いた後に、強光・高温に遭遇すると葉先枯れ（チップバーン）が発生しやすいので、梅雨間の晴天時は、早めに遮光資材を展張する。また、曇天時も積極的に換気を行い、風通しの改善を図る。

(2) 露地栽培

ア キクの白さび病、リンドウの葉枯病、ユリの葉枯病などの発生が多いので、降雨の状況をみて雨間に殺菌剤の予防散布を行う。

イ 泥や雨滴の跳ね上がりによる病害発生や生育不良が起きやすいので、防止対策（マルチ、敷きワラなど）を行う。また、風雨により倒伏したものは、早めに起こして茎の曲がりを防ぐ。とともに、殺菌剤の予防散布を行う。

8 畜 産

(1) 事前に畜舎周辺の排水対策を実施するとともに、汚泥はすみやかに除去する。

(2) 伝染性疾病や衛生害虫の発生が危惧されるので、消石灰等を畜舎や堆肥舎の周囲に散布して乾燥を図るとともに、消毒車等により徹底した消毒、防除を行う。

また、家畜の外傷の有無を確認し、異常を認めた場合は、速やかに獣医師又は、農業共済組合、家畜保健衛生所に連絡し必要な措置を受ける。

(3) 湿度が高まると飼料の変敗がおきやすいので、飼槽の状況を良く観察して残った飼料は早めに掃きだすなど、清潔にして乾燥を図る。

(4) 土砂が著しく付着した粗飼料は、給与をとりやめる。

(5) 冠水、浸水した飼料畑は、明きょ等を設け早期排水に努める。

- (6) 湿害が見られる牧草類は追肥を行い、草勢の回復を図る。
- (7) 倒伏等により生育中途の青刈飼料作物を給与する場合は、硝酸塩中毒の恐れがあるので給与量に注意する。
- (8) 牧草は刈り遅れないように注意し、高水分の場合は、サイレージ用乳酸菌資材を添加し、ラップの巻き数を増やしサイレージに調整する。